The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	英国18世紀幽霊実話の構造 ： 「ヴィール嬢の幽霊」を中心に
Author(s)	仙葉, 豊
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 53-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72696
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

英国 18 世紀幽霊実話の構造

――「ヴィール嬢の幽霊」を中心に――

仙葉　豊

この小論では、イギリス 18 世紀によく知られた 5 つの幽霊実話を分析することで、それらには、いずれも幽霊が三角形に出る構造になっていることを示し、さらにこの構造の背景になっている、啓蒙精神と霊的なものへの信仰の間の対立を考えてみたい。三角形に出るとは、幽霊が関係者間に直接出るというのではなく、第三者にいったん出ることで、その幽霊の実話性の保証を与える形になっていることをいう。幽霊がそのメッセージを相手に、例えば日本の「うらめしや」型のそれのように、あるいは、「人を目がける幽霊」のように、直接利害関係のある相手に現れるのではなく、いったん第三者に現れてそのメッセージの事実性を保証させる形の、三角構造になっていると思われる。

まず初めには、デフォーの作といわれる「ヴィール嬢の幽霊」（1706）を取り上げたい。この作品は、おそらく 18 世紀の幽霊談としては最も有名なもので、現在でも例えば、*The Best Ghost Stories Ever Told* などの幽霊物語選集にも選ばれているし、日本でも、平井呈一編『こわい話・気味のわるい話（1）』や東雅夫編『怪奇小説精華』などで、その冒頭に収録されている。ただ、これらにあっては、すべてフィクションとして収録されているのであり、実話としてではないことには注意をしておかなければならない。その原題は「ヴィ―ル嬢が死去の翌日である 1703 年 9 月 8 日に、カンタベリー在住のバーグレーヴ夫人のもとに幽霊（Apparition）となって現れた事実の物語」といういささか長い題になっていて、その実話性が強調され、冒頭の序文には、出版に至る経緯として、話が、バーグレーヴ夫人→夫人の数軒隣に住む婦人→婦人の親戚であるメイドストーンの治安判事→治安判事のロンドンの友人宛の手紙→出版する、という形になっていて、その間に立つ人々も、すべて信頼に足る人々で、嘘などつくような人でもないと書かれている。これは明らかに「事実の物語」と語り手の信憑性を保証するような役割を果たしている。話の出発点にいるバーグレーヴ夫人は、「正直で高潔な人」で「これまでずっと信心深い生活をしてきた」のだから嘘などつく人ではないと、その人物保証までされているわけである。話の伝達による真実の変形がな

いことを訴えている機能があるわけだ。われわれはまず、当時の幽霊実話には、このような出版経緯の確かさや話の語り手の評判の良さなどが、序やあとがきとして必ずといっていいほど付けられていたということを認識しておかなければならない。

また、この「ヴィール嬢の幽霊」という作品は、出版されてからしばらく経つと、実話であったことが忘れられ、デフォーのフィクション作品であるということになってしまう。幽霊が夫人との肉体的な接触を避ける場面など見事な描写力は、デフォー自身の創作力のせいだとされるようになり、「見てきたように嘘をつく」デフォーの名人芸とまで思われてしまっていたのだった。これが、ほぼ 2 世紀後の 1895 年に G.A. エイトケンによって、当時に実際に起こった事件で、新聞などにも報じられていたものであり、バーグレーヴ夫人は実在の人物であることが実証されるに至り、「今ではこの詳しい状況描写の物語が、ほとんどすべての細部において、事実に基づく本当の話である」（サザランド,192－3）といわれるようになったのである。その受容の歴史もフィクションから実話へと大きく変わったという意味で、この作品は、虚実の被膜を行き来するものだったといえるのだ。こうなるとデフォーは創作家としてこの作品を残したのではなく、事件を報じる新聞記者として書いていたことになる。James T. Boulton などは、間に入ったバーグレーヴ夫人の隣人の婦人を、この事件を素材に私的な手紙を書いているルーシー・ルーキン（Lucy Lukyn）という実在の女性に推測しているほどだ（Boulton,145）。つまりこの序文は、デフォーのフィクションではなく実話の本当の経緯を述べたものである可能性が高いのである。ただ、この話は長くデフォーの作品と言われてきたが、最近では G.A.Starr のようにデフォーの著作性までを疑う学者も出てきているのだから、一筋縄ではいかないのではあるが、Furbank＆Owens の *Critical Bibliography*(1998)ではこの作品は、まだ“Probably by Defoe”の扱いになっていることもあり、ここではデフォー作ということにしておく。改めて話の筋を辿ってみる。

【ケース 1】Veal 嬢の幽霊

カンタベリー在住のバーグレーヴ夫人のもとに、旧友のヴィール嬢が久しぶりに会いに来る。1702 年 9 月 8 日のことだった。昼の 12 時に時計がなった時に、ドアが叩かれて、出てみると、そこには乗馬服姿のヴィール嬢が立っていた。突然、旅に出ることになったので会いに来たという彼女は、バーグレーヴ夫人が挨拶のキスをしようとすると、それを何気なくかわすヴィール嬢である。久闊を叙した後で、信仰深い二人は、死を迎える人の心の在り方を説いたシャルル・ドレリンコートの宗教パンフレット「死を恐れずに」（英訳）などの本について語り合い、楽しい時を過ごしてヴィール嬢は帰ろうとするのだが、帰る前に、バーグレーヴ夫人に、ヴ

ィール嬢の兄に手紙を書いてくれと頼むことになる。そこでバーグレーヴ夫人は、手紙の中に、ヴィール嬢の言うとおり、ヴィール嬢の持ち物である指輪やキャビネットの中の金貨をだれそれに渡してもらいたいというメッセージを書いてあげたのだった。バーグレーヴ夫人がヴィール嬢のガウンを褒めると、それは、“Scower'd Silk”（洗剤で特別に洗った絹）でできていると告げるヴィール嬢であった。後に、ヴィール嬢の親戚のワトソン夫人が、そのガウンが洗剤で処理したことを知っているのは、自分とヴィール嬢の二人だけだと証言するに至る。翌々日バーグレーヴ夫人がワトソン家を訪れて、彼女はヴィール嬢が訪問の前日に死んでいたことを知る。バーグレーヴ夫人が書いて届けた手紙の内容がもとで、バーグレーヴ夫人は、ヴィール嬢の兄からさまざまな中傷を受けることになる。この話が世間に知られると新聞にも載り大騒ぎになって、彼女の話の真否を確かめるために多くの名士たちが訪れたのだったが、バーグレーヴ夫人は一貫して同じ話を語ったという。

ヴィール嬢は「旅」に出る前に、「昔の友情」を取り戻し、今生活に苦しんでいるバーグレーヴ夫人を慰めにきたのだと言っているし、また一方で、この幽霊は、ヴィール嬢が亡くなった「9 月 7 日の正午」からちょうど 1 日たったその翌日の「昼の 12 時」に出ている。したがってこの幽霊談は、親しかった友人の片方が亡くなって幽霊となり、もう一方の友人に出るという友情を軸とした慰めのタイプの幽霊談と、もう一つの、亡くなったときに前後して現れるという、いわゆる“wraith”という別のタイプの幽霊談の混合形になっているのが大きな特徴だろう。話のリアルな内容も魅力的だ。バーグレーヴ夫人が、ヴィール嬢がずっと膝を叩き「この動作は彼女がしゃべっている間」続いたとあって音の印象をうまく使ったり、挨拶のキスをしようとする（salute）のをさりげなくかわす幽霊のしぐさや、お茶を飲まない様子など細部にぞくっとする上手さがある。ただ、この幽霊実話の中で当時に最大の問題点になったのは、ヴィール嬢がバーグレーヴ夫人に依頼する兄へのメッセージにある。

ヴィール嬢は別れ間際に、兄の Mr.Veal に手紙を書いて「（自分の）指輪をこれこれの人たちにあげてくれるように、また、キャビネットの中に金貨の入った財布があるから、大きな金貨 2 枚をいとこのワトソンにあげるよう頼んでほしい」と言うのである。それでバーグレーヴ夫人は、ヴィール氏に手紙を書くことになるのだが、このメッセージは明らかに現実の人々の間に、何らかの利害関係を生じさせることになるので、当然当事者間に問題が発生する。いかにバーグレーヴ夫人がヴィール氏に含むところはなく、事実ヴィール嬢の言われるままに手紙を書いたとのだ言い張っても、その遺贈品のありようを幽霊の言葉だと言って指示することになるのだから、何らかの金銭問題が派生せざるをえず、残された二人の間には大きな摩擦が生じることになる

のである。ヴィール氏が彼の友人たちと一緒になって、語り手が言うように、全力で「この話をもみ消そうとしている」というのも無理はないのだ。

Peter Ackroyd は、数多くの幽霊実話談を収録した *The English Ghost* の序の中で、煉獄を廃したプロテスタントは、一般的には幽霊を認めず、あったとしてもそれらは悪魔的なものとして捉えられがちであったと言っている。もっともやはり現実的には、なかなか幽霊的なものは追放しきれなかったので、アクロイドは、17 世紀後半のケンブリッジ・プラトニスト、ヘンリー・モアを引用しながら、幽霊たちが殺人犯を見つけ、財産処理に口を出し、財産管理人の不正を発き、弱き者たちを慰め、行為の選択に警告を発するのに、いかに効果的な役割を果たしていたかを語るパンフレットが数多く出版されていたことを指摘している。17 世紀後半は内戦の余韻が収まらず遺産相続の問題が多く派生していただろうし、警察制度の不備から多くの不正の存在があっただろう。幽霊はその混乱のなかでさまざまな現世の人々の不満を解決する一つの手段に思われたのだ。幽霊のメッセージを真実として受けとめる風潮が、霊魂の不滅へのアピールともなり、現世改善のメッセージが大きく喧伝されるようになったのだった。「ヴィール嬢の幽霊」も、財産委譲としては問題の規模が小さいにせよ、このようなメッセージ型の幽霊実話の系列にのっていた。

幽霊の残したとされるメッセージは、その依頼の種類と程度により、社会的な機能は大きく変わってくることになるだろうが、いずれにせよ、それが周りの人々を納得させるような力をもつためには、幽霊の話を信じるに足るものとしての証拠を提出しなければならない。幽霊は何かしら超自然的な力を示す秘密の開示や証拠の提出をすることで、周囲にメッセージの実行を迫れるような、ひいては自己の存在を証明できるような何かを行わなければならないのだ。ヴィール嬢の幽霊の場合には、前述の “Scower’d Silk”であり、さらに、誰も知らなかった、ヴィール嬢が Mr.Breton という人物からの年金をもらっていたという事実であった。語り手のバーグレーヴ夫人が知りえなかったような事実は、幽霊からの情報としか考えられないもので、それはひいてはこの物語の真実性を保証し、あわせて幽霊の実在までを証明することになったのであった。この秘密の開示が物語の重要な構成要素になっているゆえんなのだ。幽霊実話のもう一つの要素として、語り手の性格とその評判がある。

幽霊談を語る者はバーグレーヴ夫人や語り手がそうであるように、その人物が住む共同体において信用され信頼される人柄でなくてはならず、理解力とコミュニケーション能力が備わっていなければならない。同時にまたこの人物は健康な心の持ち主でなくてはならない。現代でも心が病む場合は、幻覚や幻聴を伴うと判断される場合があるように、健全な精神状態であることがその話を信じてもらうためにはどうしても欠かせない条件だったわけである。幽霊と語り手が一対一の場合には、直接現れるも

のが真実のものであるか、あるいはそれが幻覚であるのかの判断ができない。証人がそばにいる場合は別だが、ハムレットの母親の寝室のシーンや、マクベスの宴会のシーンのように、周りにいる人々の目に幽霊が見えていない場合はどうしてもそれは幻覚ととられてしまうからだ。これが第三者にワンクッションおいて現れるケースの方が望ましい形であった最大の理由であろう。したがって、ヴィール氏は、この幽霊談がバーグレーヴ夫人の妄想であることを攻撃するために、彼女が夫から家庭内暴力を受けたせいで正気を失っている（“a bad Husband has Craz'd her”）と精神異常者であるとの攻撃を行うことになる。もっともこれはバーグレーヴ夫人にとっても予期されていたことなので、語り手は物語中に、彼女の話を聞いた人たちは一様に「バーグレーヴ夫人はいつも明るい（cheerful）顔で、朗らかな（pleasing）態度を保っていたので、彼女は決して鬱症（Hypochondoriack）ではない」と判断したと言って、ヴィール氏に対する反証を入れることになる。当時の医学にあっては、ヒポコンドリアは、狂気にまで至ることもあるとされた恐ろしい妄想型の病だったので、語り手は「明るい」、「朗らかな」などという形容詞によって、このような気の病に無縁な資質をバーグレーヴ夫人のものとしたのだった。幽霊は健康な精神状態であるものによって見られなくてはならないのだ。

【ケース 2】Cock Lane の幽霊

1762 年前半に、ロンドン中のジャーナリズムを賑わせ、“Scratching Fanny”と綽名された Fanny Lynes の幽霊の話である。1752 年に William Kent という男が、Elizabeth Lynes という女と結婚する。この妻は産後にすぐ死ぬのだが、彼女には妹のファニーがいて、ファニーは、義理の兄の世話をするうちにケントを好きになってしまう。近親者は教会法では結婚できないというので、二人は逃げるようにロンドンに向かい、そこで出会った Richard Parsons という教会書記の家に間借りして暮らすようになる。パーソンズには 11 歳になるエリザベスという女の子がおり、ファニーはこの娘と親しくなってベッドをシェアするほどになる。ケントとファニーがパーソンズの家を出たのち、しばらくして、1760 年 2 月にファニーが天然痘で急死することになるのが事件の発端となる。パーソンズの家のあるコック・レインで、娘のエリザベスのもとに亡くなったファニーの幽霊が出始めたのだ。エリザベスの話では、ファニーの幽霊が寝室の壁をたたいたりこすったりするというのだ。19 世紀になって盛んになる降霊会の形式でファニーと交信するエリザベスの話は、ファニーがケントに殺されたという告発になり、騒ぎがまた大きくなったのだ。これが 1762 年 1 月で、あまりの騒ぎになったので、2 月には調査委員会もでき、文壇の大御所のサミュエル・ジョンソンなどがその委員として実情調査に加わることになる。結局こ

の事件は、パーソンズがケントからした 12 ギニーの借金がもとになって、訴えらえて恨みに思ったパーソンズが仕組んだトリックだったことがわかり、パーソンズは晒し台の刑ののちに投獄されたのだった。

エリザベスに出るという霊が、ドアのノッキングや羽目板のスクラッチングなどの、いわゆるポルターガイストという騒がしい霊の段階ではまだよかったのだが、Mary Frazer という親戚の女の提案によって、イエスにはノックを一度、ノーにはノックを二度するという伝統的な霊との交信方法でエリザベスが霊と話を始めてからことが大きくなった。ファニーは自分が「赤ヒ素」を好きなビールに混ぜて飲まされ、ケントに殺されたという内容を伝えてきたからである。ケントは殺人の罪を告発され、その話が報道を通じてセンセイショナルになればなるほど大衆の怒りがケントに向けられ、身の危険を感じる程にまでなったことがあった。姿なき（幽）霊が自らを死に追いやった犯人を指弾したのだから、ケントの反発もあり、2 月には調査が始められたのだ。その結果この事件は、エリザベスが布団の中に隠し持っていた木片を見つけられて、でっち上げの幽霊談だったという結論になったのだ。ケントからの借金を返せずに訴えられたパーソンズとその指示に従った娘、「光る幽霊（a luminous apparition with hands）」(Lang,165）を見たと証言をした知り合いの酒場の亭主、間に入った牧師 John Moor、Frazer という親戚の女などの共同謀議（conspiracy）による作り話ということになり 7 月には裁判が決着し、パーソンズは晒し台の刑ののち投獄されたのであった。この幽霊談の構造も、亡くなったファニーの幽霊が年下の子供のエリザベスに出るのだから、基本的には三角形の構図に収まるのは明らかだろう。いやファニーがケントに出ずにエリザベスに出るという幽霊談構造であるがゆえに、むしろ当時の人々にありうる話として信じられたともいえるのである。この偽幽霊事件の騒動の最中、まだ判決がついていない 4 月に、これを当て込んで出版されたのが、William Hogarth の『軽信、迷信、狂信――ある混成画（*Credulity, Superstition, Fanaticism： a Medley*）』であった（図 1）。このホガースの作品は、一般的には、啓蒙的合理主義の視点から従来の迷信やそれを簡単に信じる軽信や宗教的な狂信を風刺したものとしてよく知られているものではあるが、これは具体的には、当時急速に信者を増やしていた John Wesley や George Whitefield を中心としたメソジスト派を風刺の対象にしたものでもあった。1756 年、このコック・レイン幽霊事件が起こる少し前には、ロンドンはトッテナム・コート・ロードにホイットフィールドの集会場が開かれ、その内部での説教場面がここに描かれているといわれている。高みにしつらえられた説教壇での熱狂的な説教に陶酔する信者たちと、その信ずる奇跡的な出来事を左下に配していて、右端にはウエズレーや Joseph Glanvill の本が熱源に喩えられている温度計がこの部屋の沸騰する熱情を

示しており、中央にはホイットフィールドの讃美歌の一節がみえている。ウエズレーたちは国教会にとどまりながら、教区を超えた巡回説教活動をしていたがゆえに国教会からは説教場所として教会を貸してもらえずに差別され、野外での説教を多く行っていたのだが、ロンドンでもようやくその福音主義的な主張が主に底辺の階層の間に爆発的な広がりを見せていたのであった。ホガースの信奉していた国教会広教主義は理性的なものに重きを置いていて、魔女や幽霊や奇跡などを合理主義的な立場から批判しており、国教会内部の主流派と新興派の対立がこの風刺画の背景となっていると考えられている。説教壇の下には当時よく知られていた 3 つの幽霊談がつるし人形として置かれている。説教者が悪魔や魔女以外の話題の時に用いるのである。ヴィール嬢の幽霊は左端、サー・ヴィリヤーズの幽霊は右端、中央はシーザーの幽霊である。みんな蝋燭を手にしているのは、ヴィ―ル嬢は昼間に出ているのだから、ありえないこととしての風刺である（図 2）。さらに説教者がその熱狂のあまり頭から鬘がとれて、トンシャーと呼ばれるカトリック修道士の剃髪が覗いているのは、メソジスト派が隠れカトリックであるという噂が当時に流布していたことを示している。幽霊の存在を強く支持していたことがメソジスト派への誤解の大きな理由ともなっていたのだ。

グランヴィルは伝統と革新の間を揺れる過渡期的な人物であった。ロイヤル・ソサエティのフェロウとしてデカルトなどの新哲学に基づきスコラ哲学の独善性を批判する一方で、チャールズ 2 世の礼拝堂付き牧師である高位国教会の聖職者であったのであり、最終的には、科学が霊的な存在を駆逐するのではないかと恐れたグランヴィルは、伝統的な立場に戻って *Saducismus Triumphatus*（『サドカイ主義者打倒』1691）を書き、魔女や幽霊などの当時実際に起きたと思われる事件を収集し、「霊魂の不滅性」を実証しようとするに至ったのであり、合理的啓蒙精神に対しては反転したといってもよかった。この小論でも幽霊談のいくつかをこの作品から採っているのだが、根本的には、幽霊の、あるいは霊の世界に対する不信は、霊魂の不滅とキリスト教の真理を否定する唯物主義的気質と結びつくことになるとの不安が、彼の中に存在していたことを物語っているのだろう。そしてメソジスト派も魔女・幽霊の実在を強く主張したのであった。証拠もなしに魔女を訴える者にはむしろ懐疑的になるような有識者が増えてきていて、1735 年の反魔女法（Act of Witchcraft）は、実質的にはむしろ中傷を禁じる側に立つようになってきており、啓蒙時代の精神がそろそろ一般的にはなっていたものの、地方などではまだまだ霊の顕現が人々の心を強く捉えていたのであり、Derek Jarrett によれば、ハーフォードシャーの田舎町では、1751 年になっても老婆を水漬けの魔女裁判儀式にかけようとした騒ぎがあったという。ウエズレーの考え方もグランヴィルに似て、「魔女の術を信じなければ、最後には聖書を信じなくなる」（Jarrett,184）というものであって、これを受けてメソジストたちの集会では、幽霊や

魔女や奇跡現象の例が説教によく使われていたというので、このホガースの風刺画で、グランヴィルやウエズレーがその名をあげて攻撃されていたのだった。そしてこのコック・レイン事件にメソジスト派の関与があったこともまたよく知られている。Ronald Paulson が言うように、「パーソンズ一家はメソジストだった」（*Hogarth*,363）し、この事件の当初からパーソンズを支え、相談相手になっていたジョン・モア師はメソジスト派のよく知られた牧師だったので、ウエズレーやホイットフィールドのこの事件への強い関心もよく知られていた（Uglow,652）。霊的なもの存在証明を行う絶好の機会と捉えたためだろう。ホガースはこの関連性を見逃さない。

グランヴィルの『サドカイ主義者打倒』は、その後半が幽霊実話集になっており、その冒頭に掲げられ、グランヴィル自身が調査に赴いたとしても有名になったのが Drummer of Tedworth の事件であった。これは、奇しくもコック・レイン事件のちょうど 100 年前の 1662 年のことだったのだが、テドワースの治安判事の家で起きたポルターガイストの事件で、放浪する軍隊付きのドラマーが治安判事 John Mompesson に逮捕されドラムを没収されたのち、そのドラムがひとりでにモンペッソンの家で鳴りだすという事件だった。これはドラムの音だけでなく、モンペッソンの 10 歳の娘の寝ているベッドの下で「鉄の爪」で「ひっかくような音（a Scratching）」が出るというような、コック・レイン事件のファニーと同じ現象に発展していったのだった。そばにいた牧師がお祈りをすると、椅子が動き、靴が勝手に飛んできたとも語られている姿なき幽霊であった（Glanvil II, 92-94）。エリザベスのベッドと、羽目板やベッドを叩いたといわれる木槌（mallet）を右手に持ち、左手に燭台をもった白い帷子姿のファニーがその下に描かれるのも物語要素の隣接を物語っている（図 2）。翌年に描かれた *Times Plate 1*（1763）では、このファニーの姿が、ピロリ―に架けられたパーソンズの代わりに、ホガースの政敵ジョン・ウイルクスとともに並んで晒し台に立たされ、“Conspiracy” の罪で、子供にまであざけりの小便をかけられているのだ（図 4）。ホガース描くところの風刺画の右下には、メソジストの脳の下に 2 冊の本が置かれ、そこには“Wesley’s Sermons”と“Glanvil on Witches”と書かれているのが読み取れる（図 3）。この 2 冊の本の強い影響下に置かれたメソジストたちの熱狂的状態のために室温が上昇し、その温度計の最上部にテドワースとコック・レインの事件を上下に並べてのせているのだから、ホガースの風刺の意図は明らかだろう。ちなみに、Terry Castle によれば、温度計は気圧計とともに 1730 年代には上流階級の家の応接間に飾られていたという（Castle, 26）。

【ケース 3】Anna Walker の幽霊

1632 年のこと、チェスターの近くの町に、地主で財産家のウォーカーという男が住んでいた。ウォーカーはやもめで、アナ・ウォーカーという親戚の女が家事を取り仕切っていた。二人には性的な関係があり、アナはお腹が大きくなって近所の人の目につき始めたので、ウォーカーはマーク・シャープという石炭鉱夫に命じてアナを家から連れ出させ、殺させた。アナは失踪したとしてそのまま放置されていたのだが、ある冬の晩、ジェイムズ・グラハムという粉ひき屋が自分の小屋で粉をひいていると、ドアが閉まっているのに、髪を乱した、血だらけの体に、傷を 5 つ付けた女が立っていた。彼女は、“I am the Spirit of such a Woman, who lived with Walker”と名乗って、マーク・シャープという男に，つるはしで体を 5 か所打たれて殺されたのだと言った。土手の下につるはしと血の付いた靴などが隠されているので、それを見つけて犯人を発いてほしいとグラハムは求められたのだ。そうしないとずっと付きまとってやると言われて彼は、判事にことの事情を話したのだった。捜査の結果、これが事実と分かり、殺人者たちは裁判で有罪となり、処刑された。犯罪を発く依頼をする幽霊の話である。末尾に、“There are many persons alive that can remember this strange murder, and the discovery of it.”(Sinclar,21)とある。

この話もまた、アナという被害者が第三者の粉ひき屋ジェイムズの幽霊となって出現し、自分を殺したシャープとウォーカーの罪を発いてくれとの告発をする三角形型の物語構造になっているのは明らかだろう。そして重要なのは、幽霊の証言通りに殺人に関する証拠を土手下の探索で発見できて、これが裁判での決め手の証拠になったという話の結末であり、そして末尾に置かれた関係者の生存情報である。被害にあった者が何らかの無念を晴らしてもらうために、当事者たちとは無関係な第三者に告発を依頼するというこの形は、非常に根強く当時の社会に存在していて恐らくそのバリエーションをいれれば数えきれないほど流布していただろう。そのような幽霊物語の構造に関する一般人の感性のありかたが、テドワースの純然たるポルターガイストから、姿を現すファニーの幽霊への物語的跳躍をうんだのではなかろうか。エリザベスとファニーの交霊が殺人告発のメッセージへと発展していくのも十分に理解できよう。

【ケース４】Mistress Bretton の幽霊

ラドゲイトの教区牧師であったブレトン師に信仰のあついことで知られた妻がいた。このブレトン夫人にはかわいがっていたアリスというメイドの女がいた。夫人はあるとき突然亡くなってしまい、アリスは奉公をやめて近くの農夫と結婚して子供をつくる。夕方幼子をあやしていると、ドアをノックする音がきこえる。出てみるとそこには亡くなった女主人そっくりの女が立っていた。“I am the same that was

your Mistress, and took her by the hand which Alice affirmed was cold as a stone”と自分がブレトン夫人であることを明かすのだった。そしてアリスを近くの農地に連れていき、この土地は、現在はブレトン夫人の実兄の土地として登録されているが、実はこの土地は、彼女の父親が不正な手段で貧しい人々から奪ったものだから、それを兄に訴えて、土地を貧しい人々に返すようにしてほしいのだと言った。ブレトン夫人は、寝室で寝ている夫のところにも出て、夫を起こそうとしたのだが彼は起きなかったのだと幽霊は語るのだが、これはのちになって、ブレトン師によって実際にあったこととして思い出される。証拠がなくては話にならないとアリスが言うと、夫人は“Tell him this secret which he knows, that only himself and I are privy to”と答えて、兄と自分だけが知る秘密（それが何だかは書かれていないのだが）をアリスに教える。初めは笑って取り合わなかった兄も、その秘密を聞かされると、顔色を変え、幽霊が実際のものであったことを悟ることになる。そして幽霊の土地の名義変更のメッセージは実行されたのだった。この話は、幽霊の夫のブレトン師がくり返し語って有名になったものだった。(Sinclar,131)

この話は、17 世紀後半の内乱に伴い、数多かったであろう土地委譲の問題をテーマにしている。ブレトン夫人が、直接に兄に出ずにアリスという自分の召使に出るという構造は今までのものと同様である。グランヴィルの『サドカイ主義者打倒』の第 16 話にほぼ同様のものがあるからこれはその簡略版だろう。召使が幽霊を識別するのは、次のヴィリヤーズのケース同様、容貌や言葉遣いや普段着などの点で幽霊の外貌をよく知っている者として相応しい者だからだ。その幽霊の言葉の証言を保証するものとして、ブレトン夫人と兄としか知らない「秘密」を持ち出してきているところにこの話の特徴がある。この秘密のバリエーションとしては、誰も知らない肉体的な特徴とか秘密の貯蓄とか誰も知らない近親相姦の事実などが充てられることが多い。物語の末尾の証人保証も共通している。

【ケース 5】Sir George Villiers の幽霊

初代バッキンガム公が 1628 年 11 月 2 日にポーツマスで John Felton に暗殺される数日前に、公の父親であるサー・ジョージ・ヴィリヤーズの幽霊が出て、そのことを警告するのだが、バッキンガム公はそれを無視して殺されるという話である。サー・ジョージに仕えていて、公にも仕えているという Parker という従僕がいた。ある日、亡くなったサー・ジョージが、“in his Morning-Chamber Gown”でパーカーのもとに現れ、ポーツマスに行くのを止めるように、さもないとそこで殺されることになると公に伝えてくれと言い、パーカーにそのことを約束させるのだ。パーカーは

翌日その予言を公に伝えるのだが、公はパーカーの話を老いぼれのたわごととして取り合わない。再度現れたサー・ジョージにそのことを伝えると、父親の幽霊は、それなら公と自分しか知らない秘密の印を教えようと答える。“a Token (naming a private token)which no body knows but only He and I”(GlanvillII,226) このことから公はパーカーの言葉を信じるのだが、時間が迫ってしまい、公はやむをえずポーツマスに行かねばなくなり、そこで暗殺されてしまうのだ。この話は、パーカーの同僚の Henry Ceeley から筆者（語り手の手紙の差出人）が聞かされたもので、ヘンリーは 20 年ほど長生きしてこの話を語ったのであった。（Glanvill より、Sinclar にもほぼ同じ形で再録）

この話は 1 世紀以上も語り伝えられ 18 世紀中ごろの前述のホガースの絵にも登場するほどだったのだから、恐らく幽霊実話としては最もよく知られたものだったといえるだろう。幽霊が顔と衣装をよく知る召使に現れるのは前のアリスとブレトン夫人の例とよく似ている。メッセージを保証する秘密としてはサー・ジョージとバッキンガム公しか知らない“a private Token”が挙げられているが、これは Aubrey が伝えるこの話の別のバージョンでは、体の見えない部分の「ほくろ」（Aubrey,456）であったとされている。因みにオーブリー版では、召使のパーカーは、サー・ジョージの旧友 Nicholas Towes ということになっており召使ではないのだが、その危険警告型の出現構造は変わりない。

近代人の原型といわれるロビンソン・クルーソーを作り出したといわれる一方、デフォーには、*An Essay on the History and Reality of Apparitions*（1727）という長大な幽霊論があることはあまり知られていない。霊的なものと人間の間の交流を重んじる別人のデフォーがそこにみえるのだ。興味深いのは、この作品でのデフォーの幽霊論は、プロテスタントの側からの激しい反カトリック幽霊論が展開されていることであろう。プロテスタントは煉獄を否定していたから、幽霊を煉獄から戻ってくる「死者の魂（Soul of the Dead）」と考えるカトリックの信仰には徹底して反対しており、デフォーは、Reginald Scot の「人が亡くなればそのあとで魂は地上をさ迷うことはない」（*The Discovery of Witchcraft,*389）というプロテスタントの死後の魂に関する教説を受け継ぐもので、いったん死んでしまえばその「死者の魂」は現世の人々とは交渉を絶たれてしまうというのだから、何らかの理由をもって煉獄から帰還するという意味での幽霊（ghost）などありえないのである。死後には魂は天国か地獄に行ってしまうので戻ることは不可能なので、生者と死者の間には「越えがたい溝（Gulf）」（*Aparrition,*126）があってそこを通り過ぎるともう帰ってはこれない。もし安らかに眠れぬ魂が煉獄から地上に戻ってきて正義を求め、遺言状を正しく執行し、間違った相続を矯正しない

かぎり、自分の魂は安らかには（rest）ならないなどということがあるのなら、そこには区別はないわけだから、何百万という亡霊がわれわれの日常生活の場に充満していることになり、「生者が道の片側を、死者がもう一方の道を行き交うことになるだろう」から、この地上は「住みがたいもの」になってしまうだろう、と言うのである。デフォーは様々な版の「ヴィリヤーズの幽霊」を比較・分析しつつ、オーブリー版で言われるように、バッキンガム公の宮廷での悪行が止まらない限り、サー・ジョージは「心安らかにならない（not rest in Peace）」などということは決してありえないと言っている。死後の父親には息子のことはわからないのだし、干渉のしようがないというのだ。デフォーのような生者と死者の交渉の否定はプロテスタント的幽霊論の極北といってもいいだろう。

デフォーは幽霊を善霊（Good Spirit）の出現と考える。デフォーにとって幽霊とは、何らかの Spirit（悪霊の場合は人間に実害を与えるまでにはならないが、人間の感情を使嗾したり誤解を利用したりで結果的には人を誤らせることはあるのだが、最終的には神にコントロールされる存在だと考えられている）が姿を変え人間の形をとって何らかのメッセージを伝えに出現するものと考えているのだ。冒頭の「ヴィール嬢の幽霊」でも、バーグレーヴ夫人は、この“Apparition”を“Good Spirit”としていたのだった。デフォーは、James Haddock の幽霊が第三者の Francis Taverner に出て、再婚した妻のもとへ行って彼の遺言通りに息子に遺産を譲渡させて欲しいと言って、遺言書のありかを教えたというグランヴィルの収録した実話を再録し、これに批判を加えている。死者は生者のことは何も知らないし、愛も憎しみもすべての感情は死んだときに消えてしまっている。だから、ハドックが息子の遺産に関心を持つことはありえないので、これはハドックの魂ではなくて、「特別に天からの命により人の目には見えぬ世界から送られてきた善霊（a good Spirit）」（*Apparition,*231）だと、「善霊」を強調するのだ。Ghost の意味から　Soul of the Dead の意味を排除すると言ってもいい。

われわれは 18 世紀幽霊実話における三角関係構造に着目し、その幽霊の出現のしかたとその解釈について議論をしてきた。語り手には精神疾患のない健康で信頼に足る人物が選ばれることが多く、第三者に出現するがゆえに、その証拠や秘密の保証により、直接に出る幽霊よりも客観性があると考えられていたのだった。物語が真実のものであるかどうかに関しては、調査会がもたれたりもしたのだが、その中心にいたのは聖職者たちだった。科学的合理主義が進みすぎることから、霊的な存在への疑念が生じていたことから、これに対抗して幽霊談が実話であることを例示しようとしたのであった。この事実調査の傾向は「イングランド教会では幽霊物語が調査されぬまま通用することを認めなかった」（キース・トマス 下 864）というような当時の現実的

姿勢からくることもあったが、これは 19 世紀の Society for Psychical Research へと続いていくことになる。

図像資料

（図 1）

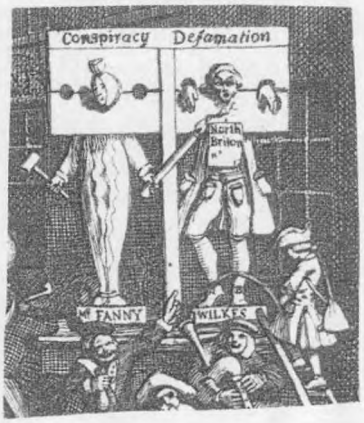
Credulity, Superstition, Fanaticism: A Medley

（図 2）

Credulity（拡大図）

（図 4）

The Times, Plate2（拡大図）



（図 3）

Credulity

（拡大図）

（図版はいずれも *Hogarth's Graphic Works* より）

引用・参考文献

河合祥一郎編『幽霊学入門』新書館　2010 年.

ジェームズ・サザランド『『ロビンソン・クルーソー』を書いた男の物語――ダニエル・デフォー伝――』織田稔・藤原浩一訳　ユニオンプレス 2008 年.

ジョナサン・スウィフト『桶物語・書物戦争・他一篇』岩波文庫　1968 年.

仙葉　豊 「幽霊実話――「ヴィール嬢の幽霊」」『さまざまなるデフォー』関東学院大学出版会　2018 年　53－69 頁.

キース・トマス『宗教と魔術の衰退』（下）荒木正純訳　法政大学出版局　1993 年.

東　雅夫編『怪奇小説精華』ちくま文庫　2012 年.

平井呈一編訳『こわい話・気味のわるい話』牧神社　1974 年.

宮崎孝一訳「ヴィール嬢の幽霊の話」『ダニエル・デフォー――アンビヴァレンスの軌跡――』研究社　1991 年.

Aubrey, John. *Aubrey's Brief Lives.* Penguin Books, 1949.

Brennan, Stephen. Ed. *The Best Ghost Stories Ever Told.* Skyhorse Publishing, 2011.

Castle, Terry. *The Female Thermometer: Eighteenth-Century Culture and the Invention of the Uncanny.* Oxford U. P.,1995.

Defoe, Daniel. *Apparition of Mrs. Veal.* In *Daniel Defoe.* Ed. James T. Boulton. New York: Schoken,1965.

… *An Essay on the History and Reality of Apparitions*(1727). Ed. G. A. Starr. *Satire, Fantasy and Writings on the Supernatural By Daniel Defoe.* Vol. 8. Pickering and Chatto, 2005.

Glanvill, Joseph. *Saducismus Triumphatus*(1681) Facsimile Edition Prepared by Bernhard Fabian Volume IX. Georg Olms Verlag, 1978.

Hogarth's Graphic Works. Third Revised Edition. Compiled with a Commentary by Ronald Paulson. The Print Room, 1989.

Jarrett, Derek. *England in the Age of Hogarth.* Granada Publishing Limited, 1976.

Lang, Andrew. *Cock lane and Common-Sense.* AMS Press, 1970(1894).

Paulson, Ronald. *Hogarth Volume 3: Art and Politics, 1750-1764.* Rutgers U. P. 1993.

Sinclar, George. *Satan's Invisible World Discovered* (1685). Thomas George Stevenson, 1871.

Starr, G. H. "Why Defoe Probably Did Not Write *The Apparition of Mrs. Veal.*" *ECF* 15(3-4): 421-450.

Uglow, Jenny. *Hogarth: A life and a World.* Faber and Faber. 1997.

Willey, Basil. *The Seventeenth Century Background: Studies in the Thought of the Age in Relation to Poetry and Religion.* Chatto and Windus, 1967.